

クリストファ・フライの詩劇

——その形と発想についての一試論——

高 谷 毅

She and I, sharing two solitudes.....

フライの詩劇の主なもの、今のところ、悲劇が一つ、喜劇が三つ、他に宗教祝祭劇が三つある。だがいずれも、人間存在の知覚とでも言うべきものの理解を示しているのである。作品の一つ一つは、すぐれて独立性を持つているのだが、順序に見てゆくと、そこに自ら亦、作者の精神が実現していつたカタチも見えるのである。ここでは彼の悲劇と喜劇をとり上げて、彼の詩劇のそういつた姿をば考えて見ようと思う。なかでも彼の喜劇は、悲劇と有機的に関連していて、笑いというものが、彼となく本質的なものを語り得ぬと言う様な、我々の偏見を打破るに充分である。笑い一つ存在の知覚を語りうるとは素晴らしいことだ。笑いと詩劇を同時に現代に回復したという点が、これまでのフライの仕事について、特に注目される点ではないかと思う。

フライの喜劇は賑やかな冗舌と途方もない奇想に充ちている。彼がひよいと言葉の角度をかえ、イデオムの関節をつけかえると、あたりまえの言葉が急に生々と表情を負びて来る。それは多くの場合、翻訳困難な、英語に即したおかしさなので、単刀直入な表現力をそなえているのである。‘a good many things’ と言うのをうけて、(嫌なことばかり多いので、) ‘a bad many things’ と言いかえす。そんなことでも、急に新しいペース・ベクチヴがひらけるのである。更に、「淑女ゼ

焚くべからず」の中で、魔法使と魔女の容疑者を対話させて、市長さんがドアからぬすみ聞きをして、黒白をきめようという段取りになる。

市長の甥

伯父さんが、そんな、カギ穴に

かがみこむなんて、恰好の悪い。

市長

いや、いや、いや、甥よ、ドアを少し開けておくんじや。

市長の甥

あはあ、成程

それならまつすべだ。……That will make us upright.

所で実は、このおかしさは単に、*upright* のシャレだけではなくて、キャラクターのうかべるおかしさとも言うべきものなのである。更に進んで、トマスが死ぬのをあきらめて、ジェネットと手に手をとつて、新しい生活に踏み出してゆく或るあけ方の対話。

ジェネット

ねえ、私はあなたの重荷になる？

トマス

左様。原罪のように、避けがたく

重荷になる。

となると、此はそうとう高度な、ヒューマアというべきおかしさである。こう見てくると、彼の笑いは、いわばイギリスの態さん八さんといった手合いにも、そしてハイブラウの輩にも対応できる幅をもっていることがわかる。此は色々な意識の段階に応じ得ている、ということなのだが、しかも、それらが一から他へ導かれるという形で連関し合っているのである。様々の段階の人々の気持に應ずることが出来、しかもプロポーシヨンを失わないということは、すぐれて練れた精神の所在を感じさせるのだ。此は英語ではマチュアという言葉で表わされるものである。さて、マチュアな形態の中に救い上げられることによつて、どんなささやかな笑ひも、根本の知覚につながれて、笑ひの意義を無意識にかくとくするというのが大切なのだ。

おろそかな劇は、見ている間は観客を酔わせ得るかもしれない、が、劇場を出ると麻酔はさめてしまうのである。フライの喜劇は、奇想天外であるけれども、その異常さは却つて深く現実なのであり、いわば我々の現実を高圧で処理し直したものである。それは見終つて後に、劇の気圧を、日常の現実に送り出す。僕らは前と同じ冗談をとばすであらう、が、いつのまにか僕らの笑いが光彩をおびて来ているのに気付く、というわけだ。僕らが日常笑い、しゃべることにおいて、詩を語り得いると、発見させること、此が詩劇の最大の成功の証明なのである。

悲劇と喜劇を問わず、フライの幕開きのうまさは無類である。それはいきなり、*medias res* ともいうべき直截さで、事のまつ只中に観客を苦もなく引き入れてしまう。開幕前のひとときは、いはば受容の準備段階とでも言うべきものだ。ざわめき。次第に、観客の心持が高揚されて来る。ベルが鳴る。幕が開く。この瞬間が大切な勝負なのだ。一つの現実のレベルから他のレベルへ、この移行がうまく行われなければ、観客はその劇の魔術にかからないのだ。詩劇の失敗は、この移行の落差を感じさせる所にあると言える。リアリズムの智慧は、その落差を少くすることによつて、自然な移行をはかる所にあらわれる。が、フライは、異常なりアリティの中に、一撃のもとに観客をひき入れ、ただちに、此から展開さるべきリアリティの受容に好都合な心構えにさせてしまう。そうなれば、どんなことが起つても、僕らを信じさせるのだ。それは景囲気の魔術と言えいいかもしれない。いきなりその劇の気圧の中にひきこみ、そして最後まで、その気圧が僕らを包みつづける。登場人物達も、その気圧圏にあるのだが、彼らは、実はその気圧に反応しつづ、互いに亦反応し合い、アクションをすすめていつていることを全的には知らない。ついに失敗が訪れ、そこで、彼が共通の気圧の中にあることに気づいた所で幕がおりののである。此が彼の劇の基本の形なのだが、それを我々は、彼の最初の喜劇 *A Phoenix Too Frequent* 「出すぎる不死鳥」においても指摘することが出来る。

幕が開く。「ロメオとジュリエット」を思わせる地下の墓の中。入口の石段の上に僅かに月の光が射している。地上は刑場。死骸が木にブラブラと下つている。すべて、暗く、ややロマンチックな死の風景。暗やみの中から声が聞える。と、此は意外

にも生命力に充ちすぎた声なのだ。此は、夫のあとを追つて死のうとする貴婦人について来た侍女なのである。彼女はけなげにも、貴婦人に殉じようとして来たのだが……

本当のことを言うと、こんなところで、泣いたり

わめいたり おなかをすかしたり のどをかわかしているよりは 私ア

半長靴をはいたハゲチャビンのハチ銅ひのおやちとねた方が

どれだけ いいか知れない。おつと、こんなことを言つてはいけない。

自分で自分をきかなかつたことにしましょう。それにしても

ダブルベッドの世の中で 生と死は本当に

犬と猫の間がらだねえ。

.....

Life and death is cat and dog

In this double-bed of a world.

すでにここで、この劇のキイノートがうち出される。生と死の奇妙な鉢合せ、一種当惑したような気分が、この劇の雰囲気なのである。テーマは簡単に、急テンポに展開してゆく。やがてここへ死骸の不寝番をしている兵士がふいと入ってくる。彼は人生に幻滅を感じていた。が、夫のあとを追つて死のうとする健気な貴婦人の存在が、彼に失われた人間性への希望を回復させるのである。彼はブドー酒とパンを貴婦人にすすめる。急にあたたかく血がめぐり始める。二人はいつしか意気投合してしまうのである。兵士は言葉を尽して、彼女に死をおもいとどまらせる。所がこの時大変なことが起つていた。死骸の一つが誰かに盗まれてしまつたのだ。兵士は剣をぬいて、自殺しようとする。今度は（皮肉にも）貴婦人が止め役に廻るのである。だが所詮助からない、と兵士は言う。

アー僕は死ぬんだ

僕の心の舞踊よ、僕は、死ぬんだ、死ぬ。

服務規則第六條、第三節だ。もうだめだ。

I have to die.

Dance of my heart, I have to die, to die

..... It's section six, paragraph

Three in the Regulations. That's my doom.

うまく訳せないが彼がしきりにくりかえす「服務規則第六條、第三節」という言葉がここでは実におかしい。が、考えてみると、此は大変な事なのだ。現実には僕らを生かしたり殺したりするのは、まさにこの「服務規則第何條」なのだから。しかし、この劇の雰囲気は僕らをとらえ、感じさせる人間存在の深さが「服務規則」に囚われている兵士を笑わせるのである。ここでは当り前のことがおかしく、予想外のことが自然なのだ。貴婦人は素晴らしいアイデアを考えつく。彼女の方がいち早く存在の気圧に気づいたのである。夫の死骸を代りにブラ下げておけばいい。と言うのだ。

兵士

えつ、あなたの御主人をブラ下げる。

ダイナミーニ、そりやおそろしい。おそろしい。

貴婦人

何て、あなたはワカらないのでしょうか。私が愛したのは

彼の生よ。彼の死ではありません。そして今私たちは、彼の死に
生の力を与えることが出来る。おそろしい。いいえ。すばらしい。

.....

How little you understand, I loved

His life not his death. And now we can give his death

The power of life. Not horrible: wonderful.

ここで二人はあらためて生のいみを獲得したのである。

所で、兵士と貴婦人が愛し合い始めた時、それは二人にとつて大變な失敗であつた筈だ。そのために貴婦人は殉死という当初の意図を挫折されたことになる。一方、殉死をやめた貴婦人は、兵士にとつて、もう美德の女神ではない。しかし、それぞれの当初の意図の失敗によつて、二人は共通の場に出会い、劇の緊閉氣と一致したところで、ここに芝居が終るといふ、フレイの劇の基本のカタチが見られるのである。侍女は、凡人の代表という立場で、いわばこの主人公達と観客との仲介者となり、最後には、共にこの共有の場へつながつて、「二人の旦那様のために！」乾盃するのである。

「不死鳥」において存在の自覚への展開のキツカケとなるのは、ブドー酒と死骸の紛失なのだが、もしそのキツカケが、愛する人間の死となれば、風景は深刻である。いわばそこでは、中心示度とでもいふべきものにおいて、すさまじく存在の氣圧が示される。「悲劇は人間存在のデレンマの表現だ。」とフレイは言う。彼の唯一の悲劇 *The Firstborn* 「長子」は、旧約のテーマをとつて、人間の存在風景の中心の知覚を、深刻に描き出したものである。モーゼが大きな力に導かれて、圧制の下に苦しむイスラエルの民をエジプトから脱出せしめるというテーマからしても、モーゼは当然中心示度の下にある。ここでも意識の層が示されている。中心的知覚のいわば直下におかれるモーゼに対して、もつとも遠く離れたものとしてエジプト王があり、この対立の中間にあつて、先程の侍女の立場に立つものは王の妹アナスである。彼女は嘗てモーゼをイスラエルの民より拾い上げて、エジプトの王子として愛し育てた。が、或日突然民族の血の呼ぶ声を聞いて、モーゼは彼女の下を去つたのである。彼女はいわば年老いたヒューマニティとでも言うべきものを表わしているのであろう。開幕の不意討はやはり美事である。宮殿のテラスの上にアナスと姪の王女が立つている。背景に大きく一杯に、建設中のピラミッドが見える。突然、焼けつくような空氣をつんざいて悲鳴。黒々と鳥の群が一瞬とび立つ。そしてしずまる。何でもない。イスラエル人の奴隷が一人、足場をふみはずして死んだにすぎない。何でもない。誰かが又死に、大建築は中空に向つて無表情に伸びる。ただそれだけなのだ。王女はあどけなく言う。「まあ、此のテラスの熱いこと！パンが焼けそうよ、叔母様。」だが、アナスはすでに只な

らぬ気配を感じるのである。モーゼの出現を彼女は予感する。モーゼが去ると共に彼女は自分の存在の意義を失つてしまったのだ。モーゼに対する彼女の今の気持、内面の荒涼さは、すぐれて劇詩的に表現される。

時折彼は、私の脳髓のまわりを

公休日の終りの紙屑のように吹きめぐる。

Sometimes he blows about my brain

Like litter at the end of a public holiday.

と、いきなりモーゼがテラスの下にあらわれる。彼は王と談判する為にやつて来たのである。王にとつてイスラエルの民は国家の必要に奉仕する数量にすぎない。ここにモーゼと彼とのはげしい対立と争闘が展開されることになる。この対立は美事である。王はその大きさ、かけ引きにおいて、いささかもモーゼに劣らない。モーゼは言う。

暖い心で以て この未熟な世界を

熱成させるのは、個々の自由を持つた

個人です。彼らは、

この奴隷たちは、悪夢の涯にいたるまで あなたと

そっくりな人間なのだ。

王は動じない。「私は近来、頑固な忍耐力を学んで居る。もつと涼しい時に会おう。」と、受けとめるのである。これは相当な人物なのだ。所で、この二人の力をこめたぶつかり合いにおいて、一寸したもの、のあわれが劇にただようのだが、二人の中間にあつて、それに敏感に反応するのは王子ラマシーズなのである。彼は何ごとにも素直に感動的な青年であり、いわばアナスに対して、無邪気なヒューマニテイの立場を表わしていると言える。

彼は早朝、沼のほとりで狩をした。驚き飛び立つ鳥の群を狙つて、意気軒昂として、一羽の「栗色の胸の小鳥」を射落した。だが。

小鳥の神経が あまりの暗さに

おびえるのを 僕は見守つた。そして彼の死を
のぞき込もうとつとめたのです。

死は深く底の方にある、と思われて

朝と死は奇妙なほど 別々のものだつた。

小鳥は朝日を浴びて、ころがつていたのだが……何となく
瞑想となへも別々のものだつた。

I watched his nerves flinching

As they felt how dark that darkness was.

I found myself trying to peer into his death.

It seemed a long way down. The morning and it

Were oddly separate.

Though the bird lay in the sun : separate somehow

Even from contemplation.

此は彼の無邪気な共感力が、却つて感傷以前のすばやさで以て、意外に深く事物の核心にふれ得たことを示している。不可
知な死が突然眼前にあらわれた時の、小鳥のおびえを、彼は自らの神経の顫動において適確にとらえて居り、ペーソスよりも
もつとくつきりとした明暗の対比において、いわば「事物の涙」にふれているのである。こうした彼の心はモーゼの心とひび
き合うのだ。モーゼは次々と王を窮地に追いつめ、王は一步一步護歩しなければならぬ。今や神はイスラエルの民に幸いし、
解放は寸前と考えられる。この時モーゼに大きなつまづきが訪れる。大いなるものの手は最後に、エジプトのすべての長子の
上にふり下される。モーゼはデレンマにおち入るのだ。イスラエルの解放は、王子ラマシーズの死において達成されることに

なつたのである。彼は驚く。生命のかぎりをより合わせて、迫まる死の手を防ごう、と絶叫する。しかし既に暗黒の翼はラマ
シーズをとらえた。

ああ 大きな嘆息が

空気を一杯にみたしてしまつた。もう呼吸をする所は
どこにもない。

王子は死んだ。失敗感がモーゼを訪れる。

私は光のあとを追つて、盲ひてしまつた。

I have followed a light into a blindness.

しかし、挫折における偉大さの獲得という形が此の劇にもあらわれる。モーゼは、フラスタレーションにおいて、存在の氣
圧のまつ只中の知覚とでも言うべきものを受容する。

私にはわからない。何故神は必然、

悲しみを糧とするのか。だが、そう思われるのだ。

I do not know why the necessity of God

Should feed on grief; but it seems so.

ラマシーズは今や「小鳥」となり、モーゼは「ラマシーズ」だ。そして、この深い共感の場において、王子の死は、今やひ
とつの深刻な問いとなり、モーゼは自らの生をはその応答として感得するのだ。

死は彼らが我々に発した問ひだ。そして

我々の生は、彼らの理解ともなり当惑ともなる。

そうだ、彼らに答へつつ生きることによつて、

我々も亦 自らの

束の間のうちに答へるのだ。

Death was their question to us, and our lives
Become their understanding or perplexity.

And by living to answer them, we also answer

Our own impermanence.

そして彼はアナスを慰め、イスラエルの民を率いて、砂漠へと出発してゆくのである。

イスラエルにも エジプトにも

なお訪れて来る朝があり、この太陽の輪のめぐりが

空しかろうとは思えませぬ。我々はめいめいの意味を

各自の日々の納得において 見出さねばなりません。

我々がついに、この世のいみにおいて出会うまで

その時まで

フライはこの劇について次の様に言っている。「モーゼは成熟^{マチュリテイ}への進みを示している。つまり彼は神秘の只中における人生の、均衡^{バランス}に向つて働くのである。ここではデレンマ^{コンフリクト}とか争鬭^{コンフリクト}は、その均衡のゆれ動きを示すのである。」所で「主役は見モーゼと考えられる。しかしラマシーズの表わしている生命のカタチが終始中心的な位置を占めているということを、私は知つてもらいたいと思う。」と言っているのが我々の注意をひくのである。モーゼも、その他の登場人物も、抽象的でなく、優れて個性をもつた肉体として我々を印象づけるのだが、それにも不拘此は単に個々の性格の劇ではなくて、ラマシーズの生死をめぐつて深い共有の場があらわれて来る。フライがこの劇で最も重視しているのは、この場であることを「長子」という題は示している。それは彼の次の言葉によつて明かである。「ラマシーズは敵方に立つ無邪気、人間性、活力、価値なのである。

そうかと言つて、それはモーゼの大義の正しさや必然性を変更することは無い。只彼は、人の道と神の道とを、深く緊急な疑

間符でつながるのである。逆に、この場において孕まれている故に、各人物が個性として実在的に僕らをうつのであると言える。以上の観察から、作者が終始個性と共有の場の同時的知覚とでも言うべき所に立つてその劇を發想している事がうかがえる。

この劇でフライはサイドプロットを用いている。本筋の、モーゼとアナスの「母と子」の關係に、モーゼの甥とその母のテーマをからみ合せつつ、舞台に展開される人生の幅と隱影を深くしている。すると彼は、次の二つの喜劇にもそれをもちこむのである。フライにとつて表現さるべき知覚が深まるにつれ、それはすぐれて技術の問題として把握されているのであらう。

さて中心直下の知覚を深めた後に、我々はその理解を、次の喜劇 *The Lady's Not For Burning* 「淑女は焚くべからず」に見る。此は潑刺として楽しい芝居である。「不死鳥」の真面目な軽々しさといつたものが、此所では潑刺としたヒューマアに成長している。テンポもキビキビと爽快で、この劇の季節感はどうしても春である。魔女や魔法使が真面目に信じられていた時代の、田舎町のロマンチックな寡黙気が楽しい。主人公のトマスという青年はそのニヒリズム、その人間嫌いすら甚だ爆發力に富んだ生命の表現と見えるのである。彼の悪口さへも爽快だ。知的で爆發力にとむ。テーマも簡潔で奔放だ。トマスは生きているのが嫌になつて、市長さんにたのんで絞首刑にして貰おうという、素晴らしいアイデアを抱くのである。それには理由がなけりやならない。スキップスというボロ屑みたいな爺さんを殺しました、と嘘をつく手筈にしておく。彼は勢いこんで市長公邸の窓からのぞきこむ。中では孤児で、大いにまつとうで、少し鈍重な、リチャードという書記がしきりに計算をしている。ここで幕があく。

トマス タマシイ！

リチャード —— 次は左官屋か、これは六〇錢也、と……

トマス やいタマシイ！

リチャード —— セツチンの穴ふさぎのアタイ——

トマス

ニクタイ！

このソロバンはじきの粘土野郎！

というテンポで展開してゆくのである。所で僕はここを読んで、ふつと影の様におかしさが通りすぎるのを感じる。いわばこの場の雰囲気のおかしさといつたものである。この二人の出会いに何か一寸表情があるのだ。此はトマスだけのおかしさでもなければリチャードのそれでもなくて、トマスという急テンポな奴と、リチャードという緩慢なテンポの奴との、鉢合せの波動に一瞬のおかしみがある、といったようなものだ。この波動性のおかしさは同時にテンポの早いペースなのだ。これがこの芝居のキイノートなのである。此はリチャードもトマスもまだ気づいていないが、ひそかに彼等を動かし続け、彼等に生命を与えている、作者のボエジーなのだ。

Thomas Soul!

Richard —and the plasterer, that's fifteen groats—

Thomas Hey, soul!

Richard —for stopping the draught in the privy—

Thomas Body!

You calculating piece of clay!

この波動が終始伝えられてゆき、結局、同じ表情が最後の

Jennet Am I an inconvenience

To You?

Thomas As inevitably as original sin

に深められているのである。此は何かしぶとい人生が時々浮べる途方もなく阿呆な表情を囚えて居り、その知覚がヒューマアとなつてゐる。

こういう知覚を表現する為には、作者にとつてことは一段と精密で高度な技術の問題となつてゐるであらうと推察されるのである。事実、この劇では「不死鳥」の登場人物が三人だつたに對して、十一人という多数になつて居り、比較的軽いワキ役までがよく書き分けられてゐることに気づくのである。先程引用した市長と甥の鍵穴のぞきの条りも、二人がそれぞれ個性として印象的に書き分けられてゐるのであつて、実はそういう個有のキャラクターが會う場面の表情のおかしさなのである。

逆にまたそういう表情がただよつて、彼らを比類なく個人としてゐるのである。してみるとヒューマアとは、個人の知覚と共有の場の知覚を同時に含む地点の感覺と言つてみたらどうかと思ふのだが、作者はまさにそういう地点に立つて書いてゐるのであらう。さればこそいち早くキイノートを打ち出し得た、というわけだ。だがそういう全体の形に、登場人物は全的に気づいてはいない。彼らはその一面ずつを背負つてゐるにすぎない。しかも彼らは自らの了見で動いてゐるつもりなのである。

そのぶつかりが全的な表情をあらわすということになる。が最後に了見の挫折によつて、主人公は始めて場を全的に自覺することが出来、偉大さを表わすということになる。動きを見て来た観客もそこではつきりと全体の形をつかむということになるのである。かくて中心的人物はつねに、意図——挫折——自覺という構図を描き出す。彼は一番了見への激しい脱出ぶりを示すのだが、その故に異常と見えつつも、始めから色濃く全的な場の雰囲気や背負うのである。フライは人生をこういう形で見てゐるのであらう。そこでは意図とか、自ら思つてゐる意味とかが、存在という球の上の一曲線にすぎないのである。にも不拘全身をかけて意図へとび出すことがすべてなのだ。そして意図が場を背負つてゐることが大切なのだ。

トマスは実は永い戦争から歸つて来たのである。戦争は徹底的に個人を抹消する場だ。彼は自分の個人としてのレズンデールへの信頼を失つてしまふのである。そうした彼にとつて絞首刑を志願することは、存在の重みを賭けた最後のなかなのであつて、最終的な自己表現、個性カクトクへの意図なのである。だが“I want”と“to be hanged”などという言葉のむすびつきを誰が理解するであらう。凡そ市長さんとか牧師さんとか裁判官にはそういうポエジーがわかる筈がない。此はひどい神経衰弱、いや狂人である、と解釈するのである。所でここにジエネットという若い女が連行されてくる。スキップス

という爺さんを犬にかえた、と町の人々は言い、魔女の容疑濃厚なりというのである。彼女の父は錬金術師であつた。彼女も又二三の実験をたしなむ。取調べの結果、「明日焚殺すべし」と宣告が下る。ここに奇妙な出会いがある。死にたくて死ねない男と、死にたくなくて死なねばならぬ女が出会い、同じ場所一夜をあかすことになるのである。彼女は自然科学的世界観を持つ。個人に何のいみもおかない。生成と消滅があるばかりだ。(と、それまでは信じていたわけだ。)しかし彼女は消滅するには余りに美しい。おつちよこちよいの市長の甥が来て、思いをかなえさせるなら、そつと逃がしてやろうという。彼女の非個性説からすれば、誰に身を任せてもいい筈だ。しかし、明日死ぬまでに生ききらねばならぬ濃厚な時の密度の中で(私の家は長生きの家系なのよ)と彼女はトマスに言う。彼女は甥を拒否し、むしろ死を選ぶことによつて、個性カクトクへの意図を示すのである。ここに死にたい意図をもつたものが二人出来たことになる。所が、ここで美事なドンデン返しが行われる。トマスが殺したと言ひ立て、ジェネットが犬にかえた筈のスキップス爺さんが、泥んこに酔はらつて出て来て、実は dead じゃなくて dead drunk (でい酔)であつたのであり、犬のごとく泥にまみれていたのである、という事がわかる。そこで二人の個性カクトクの意図は挫折^{フラストレイト}した事になる。ところが、みごとに肩すかしを喰つて、二人がすてんところんだ時に、二人は存在の繁囂^{フラスカレイト}にきづいた。そして泥をはたき立ち上つた所で、手を握り合うことが出来た。二人は愛と個性を同時に獲得したことに気付くのである。こういう、笑いにおける立ち上りという呼吸が、いかにもフライにおけるイギリス的ヒューマアの血縁を感じさせるのである。さてそこでトマスは「原罪のごとくに重い」ジェネットの手をとつて、二人でサワヤカナ朝へと旅立つてゆくと言うことになる。

テーマの單純素朴さはフライの特色である。それはそれだけを抽象してみると、フアース、メロドラマ的ですからある。例えば一九四七年二月の或る新聞に、いつもの殺人を申し立てた男の談話が出た。「私は人生本当に生きるに足らぬと考え、世間をアット言わせるために、絞首刑を志願したわけです。」と、フライはここに形而上^{メタフィジカル}詩を感じとる。「淑女」が出来上るといふわけだ。同じ筆法でゆくと、三人の女と過去に關係した男が、寄る年波に恋の無常を感じて、どれか一人を選ぶこと

にする。女の一人が男のやり方に反撥を感じて、男の家に放火する。女は後悔して自首する。男の談話。私はあれが刑を了えて出て来たら一緒になろうと思います。ああ又か、と思う。で僕らはその新聞で相変らず退屈なベントーを包むのである。がフライは忽ちここに永遠のテーマをよみとる。男を中年の侯爵にする。妻えらびの趣向はパリスの故事にならつて、息子にリッポを渡させることにする。その時期は日蝕。真昼の太陽がカゲリ始めた時。場所は嘗ての恋のアヴァンチュールの寢室（今は望遠鏡をおいてある部屋。）ここに劇はロマン的な凋落の相、魅力ある decay といった鬱囲気で展開されることになる。此がフライの一番最近の喜劇 *Venus Observed* 「ヴィーナス観測」なのだが、以上三つの劇について述べて来たフライ劇の一般の構造が、ここにも見られるのである。僕は此をば今まで実現されたフライの形の、最もマチュアなものとして見ているのだが、ここでフライが此の劇について言っていることを聞き、我々のこれまでの観察の結果と照し合せておきたいと思う。

「私はここで一連の四つの喜劇の一つを書いてみたのである。そういうカテゴリーがあるかどうか知らないが、私の書いた四つの劇を、気分の喜劇とでも呼んでみたかどうかと思つている。つまり場景・季節・人物が一つの季節に包まれていることをいみするのである。『ヴィーナス観測』においては、季節は秋である。場面は凋落の相を示し始めた家。人物も多くは中年の者である。」「しかし、私が一番語りたいと思つているのは、この気分の中におけるテーマであり、そのテーマの中にあるパターンといったものである。」と、フライは言つている。

さて、この劇の季節感、秋、存在の風景は秋の季節だ。恋の空しさに疲れて、夜空を観測して暮すオールター候は、息子エドガーに妻を選ばせようとする。彼は所謂個人的好みにはもう飽きてしまつた。ただ選んでくれればいい。私が一週の内で月水と幸福になるか、火木とするか、それとも金土とゆくか。位の所なのだ。と息子に言い渡すのである。だが意図の奇抜さは甚だ個性的だ。我々は彼の人間としての次元が潜在的にもせよ、平面的でないことに気付く。基調は淋しさだ、と彼は言う。

いいかい

しらべは、さびしさだよ。男どもは

女王を失つた蜜蜂の群だ

家もなく 永遠の関心を抱いて

右往左往しているのだ。

此は彼が存在の雰囲気^{アトモスフィア}に幾分深く気づいていることを示している。

「淑女」に表われたワキ役の面白さは、ここでは一段と思いきつたデフォルマシオンに於いて示される。しかしそれはあのディッケンズの人物戯画化のおち入り易い感傷から免がれている。侯爵の二人の下僕は、一人はかつてライオン使いであり、一人はかつて夜盗であつた。前者は今もしきりとジャングルをなつかしみ、後者は梯子をよじのぼりたくて脾肉の嘆をもらすのである。なかでも家令リードベックは、いかにもイギリス的純血種の家令の特徴をそなえている。此は首の骨が硬くて、太つちよで、ヒューマを解する奴——時々表情をふつとうかべる奴だ。彼は帳面をあずかつているが、地代のサヤをかせいで金をため、息子を大学に通わせて居り、レスベクタビリティをあこがれている。娘はアメリカで消息不明。息子はオヤジの不正を知つて、倫理^{エシックス}の名においてオヤジを攻撃するのだが、この父子の対立が一寸したサイドプロットになつて、此から展開する侯爵父子の恋のサヤ当ての対立とパラレルになつている。この家令の息子は言わば、小規模乍ら、「長子」のエジプト王に当り、表情を欠いた意図と意味で百パーセント動くのである。だがリードベックは今朝は幸福だ。突然娘が「帰る」と言つて来たのだ。

さて、日蝕も近づき追々と三人の女達が案内されて来る。「この部屋は何なのです。」「此は御承知の……あ、いや、寢室だつたのですが、今は天体観測室でして、御前は実験を時々なさいます。」「あの人はいつでも実験でしたよ。」というようなやりとりが面白い。この三人の中でロザベル一人が浮かぬ顔をしている。いよいよ日蝕になつて、エドガーがロザベルにりんごを渡そうとするが、彼女は受取らない。そこへ突然ヴィーナスのように、海からリードベックの娘が帰つて来て、この部屋へ現れ、侯爵のプランを挫折させてしまう。この日から父と子が同時にこの女（パーペチュア＝永遠という名の女）を想うのであ

る。パーペチュアの兄は、侯爵の意を迎えるように妹をそのかす。もしオヤジの不正がバレても、妻の父となればどうもしないだろうと考えるのである。此の意図の休止において、倫理君にも一寸表情が出て来る。彼女も侯爵と密会する事に同意する。所が二人が深夜の観測室で会っている折しも、誰もいないと思つてロザベルが建物に放火する。火の手が迫ると、パーペチュアは、エドガーを愛している事を告白する。二人は下僕の活躍でやつと脱出し、ロザベルは自首する。

舞台には最後に、侯爵と疲れはてたリードベックがとりのこされる。遠くまだ火明りの見える庭で、ひしひしと存在の気圧が二人を包み、二人は無言のうちに了解し合う。だが家を失い、恋を失つた侯爵は決して我々の憐みの対象にはならない。却つて彼の自覚は存在の季節と一致して深まり、偉大なディメンションをあらわすのである。実は、彼は前からリードベックのちよろまかしをちゃんと知つていたのだ。だが私は許す、と彼は言う。

私は許す

肉より生れたるカドにより我ら兩人を

許すのだ

そうだ。

存在の名において、私は

幸福になろう。私自身のためにだ。

そして此所でヒューマアと詩の最もマチュアな形がうち出される。

あれと私とで、二つの孤独を分けあい

我々はここを高く運ぶのだ

そこはあの夜鳴鳥もしらぬ所で

そこでは歌はしづかであり

クリストファ・フライの詩劇

しづかなるは歌のしらべだ。

She and I, sharing two solitudes,

Will bear our spirits up to where not even

The nightingale can know,

Where the song is quiet, and quiet

Is the song.

此所には一つとして難しい単語は用いられていない。しかもそれらが格調の高い、生命にみちた表現を達成している。此所にのべられている事は、恐らく相当高度なフィロソフィなだが、それにも不拘、直接的な伝達力をもっているのである。しかしそう言っただけでは、まだ充分ではない。

第一行のすぐれたおかしさはどうしても僕には翻訳することが出来ない。それはかなしみの充実し切つたところに表われてくるおかしさともいうべきものだ。生命力が全く充実しきつて結晶してしまい、その結果出来上つた形がびくとも動かぬ表情を浮べている様に思われて、僕はただひたすら驚いているのである。

そして此の幕切れが、最後に人生そのもののような途方もない茫漠とした大きな表情を浮べる。侯爵が静かな充実において語り続けていると、リードベックはいつしかコックリコックリといねむりを始めているのである。リードベックは段々と無に帰してゆく様に見える、それと共に無そのもののような大きな表情を背負うかに見える。その二人の対面のおかしさが結局此の劇の中心の知覚なのである。

そこはあの夜鳴鳥も知らぬ所で

そこでは歌はしづかであり

しづかなるは歌のしらべだ。

なあ、リードベック、我々が此から

眠りにおいて別れるまへに、ひとつ聞かしてくれ

この淋しいひとときが、我々をなだめすかして

一体どこへ連れてゆこうとするのか。

と、リードベックは、やさしく、いびきをかいて眠っているのである。

うん そうか そうか その通りだ

やがては そこへ来ることになるのだ。

此の場のたたずまいは、すぐれてマチュアな表情なのだが、マチュアというのは、枯れたおかしさという様なものではなく、すさまじい圧力をはらんだ微笑の様なものだ。僕はふと、チェホフの「三人姉妹」の幕切れを思い出すのである。立身栄達の望みを一すじにかけられた兄が、妹らの望みを一つ一つうら切つて、平凡な男になつてしまい、ふつと乳母車を押して舞台に出て来た時の、途方もない人生の表情のおかしさである。それにしてもこちらはいかにもイギリス的なおかしさである。

薄気味悪く、おかしく、そうして不思議ななぐさめに包まれている。いわばドアの外には人生という怪物がまさに生そくしており、その息吹きがふつときこえるのだが、ドアの中ではダンロがもえ、犬がじゆうたんの上に眠っており、人々は笑いつつ紅茶をのむ。そしてそれで美事に、猛烈にバランスが保たれているといった風景なのである。

侯爵と家令はそれぞれ別個の孤独を抱き、その限りにおいてまちがいなく別個の人でありつつも、まちがいなく了解し合っている。この劇の脇役達もすぐれて個人なのだが、この劇では、彼らもめいめいこの場の感覚に入り、救いのわけ前にあずかっている。リードベックの息子も遂には、「さても倫理は難しいものだ。」と言う事によつて、彼も亦この場についての彼相応の自覚を示すのである。それぞれライオン使いと夜盗であつた二人の下僕も、一人は炎のたてがみを持つたライオンと闘い、今一人は階上の窓に向つて合法的に梯子をかけることが出来て、彼らの心理的傷痕を癒されるのである。各人がそれぞれの意

識の段階に応じて自分の救いにあずかっているということは、前にも言つた意識の複合的統一という形態であつて、フライの各作品を通じての根本的な構造なのだが、ここではそれが作者の特に力をそいだ問題となつていると考えられる。そしてそれがここでは一番明確な形を与えられている故に劇の形はすつきりとまとまつた印象を与え、緊閉氣とパターンの結びつきも最もデリケートに達成され、マチュアなびきに結晶しているとと言えるだろう。意識の複合的統一という形が、特にこの劇の関心事であつたと推測されると述べたが、フライの次の言葉は彼のそういう發想を示すものであろう。「彼等(登場人物)は皆異つた孤独におけるキャラクターである。」「They are characters in different solitudes.」(Solitudes という複数の形はいかに我々の「孤独」ではあられし得ないものだ。彼らは皆それぞれ心の中に充されぬ空間^{キャラクター}をもつてゐる。それを充すためにめいめいは独自の始動をするわけだが、彼らは跳躍——墜落という孤を描くのである。しかもそれが全体的な場の中に導入されてゐる故に、墜落において場への全的な自覚がひらけ、墜落における偉大さの獲得という形を描き出す。このフライ劇における共通の構成をば、跳躍——墜落——新生というひろがりにおいて、一言で言えば Anti-climax の劇と言つてみたらどうかと思う。それは意味の追究の失敗におけるいみの獲得というモラルを浮べてゐる。近くはチェホフがそのような知覚を最もよくあらわして居る様に思われ、チェホフもすぐれて Anti-climax の劇作家であつたと言えるであらう。遠くはシェイクスピアの「リヤ王」が Anti-climax のすぐれた典型を示している。リヤ王は墜落において、我々の單なるあわれみをひきはしない。一切を失うにつれ彼はコスミックな大きさにひろがつてゐる。Venus Observed は、笑いにおいてそれを了解したのである。さてここで大切なことは、この劇で了解されたものは、笑いにおいてしか了解できない呼吸のものだ、ということである。更に言えば笑いの詩劇においてしか了解できない機微の感覚を示すのである。それはすぐれた wisdom, maturity の知覚であらう。

She and I, sharing two solitudes

は、フライのキイノートの最もよく熟したしらべだ。

“Solitudes”を“Share”してゆくということが、フライのモラルの基本的な形なのであろう。それは‘Solitudes’と‘Share’の同時的知覚を含む感覚だと思われる。事は動的で Mature な感受性の問題なのだ。それは亦、人間存在の中心部の‘さまざまいいエネルギーについての原爆的原理の知識をば、家庭の暖炉に小さく執拗に燃やしつづけてゆくというような、至難な工夫をいみするのであつて、実人生においてははすぐれて wisdom と名づけられる感覚である。フライの喜劇は基本的にいつも男女の組合せをおいている。此がフライの見る人生の喜劇的形態なのであろう。いずれもがとび上つて墜落し、Anti-climax のグラフを描くのだが、この宇宙的スケールのパレレルな宙返りにおいて、墜落の落差は男の方が大きい様である。女はいつもリチャード的、リードベック的な、むしろ大きな表情として描き出され、現実には男にとつて centre of gravity となるのである。男はとび上つて地面に墜落した時に、いつも女がほんの少しばかり大地の中心に近く位置していたことを思い知らされる。まさしく此は男の書いた劇に相異ないのであつて、一連の喜劇の題名、*A Phoebe Too Frequent*, *The Lady's Not For Burning*, *Venus Observed* と並べて来ると、此所には男性の永却の嘆息と笑いが、凄じい圧力を孕みつつ静かに結晶しているかの様だ。フライは言葉のすぐれたいみにおけるフェミニスト、home-loving な亭主であるに相違ないと僕は見ている。不死鳥は又しても生きかえり、淑女はついに焼くを得べからざるものだ。そして *Venus Observed* とはヴィーナスの正体みたり、ということなのではないか。

フライはしずかに驚きつづける。恐らく彼の人生は驚きを形成し続けてゆく場であらう。彼の詩劇も亦かかる場の実証に他ならない。我々が真実失つたものは、詩劇ではなくて、そういつた日常の場の感覚ではあるまいか。

此はいわば受苦^{suffer}という知覚の場における形成なのである。墜落した主人公達が同化し一体となるのはいわばこの suffer という感覚の場である。感受性の全き回復はこの場において可能となる。感受性を suffer の場において成長せしめてゆくということが、フライという人のカタチだと思われる。感受性の受苦の場における形成作用、それは始めから終りまで成熟^{mature}の支配する風景である。僕はこの小論において属々「マチュア」「マチュリティ」という言葉を使つて来たことに気づくのだが、

この小論自体を「マチュリティの研究」と呼んでみたかどうかと思ひ始めている。フライという人のカタチがつねにマチュリティの形に包まれつつ風景を深化していっていると思われる。此は今後とも基本のカタチとして変えることはあるまい。とすればここで我々は、彼がモーゼについてのべた先程の引用をもう一度思い起してみたい。彼はモーゼのマチュリティへの進行に關連してデレンマという言葉を使っている。成熟とはデレンマの停止ではあるまい。それは却つてデレンマの深化と同時に至難な均衡が保ちつづけられることをいみしている。年をとるにつれ益々人生の謎が深まり心の内面の二律背反コンフリクトがきびしさを加えるにつれ、益々表情が優しさを加えてくるといった事情を示すのである。受苦サファリとは先ず以て内面の争闘への徹底的なリアルな眼をいみする。それは「受け」「苦しむ」という同時的な知覚を表わす言葉であり、苦悩への勇氣ある誠実さが同時に、大らかな受容の実現である事をいみしている様に思われる。二つの相反するものの激しいぶつかり合いにおいて、同時にその各々すら気づかぬひとつの表情が争闘を包み、いつしか表情が光輝をおびてくる。まことのアクションとはいわばそういう場での形成に他ならない。神秘ミステリー或いは vision という既に実感を今日喪失した言葉は、かつてはそのような形成において背負いつづけられたのであつたらう。それが古代から中世にかけての人間の中心的な風景であつたことを、今日我々はあらためて気づき始めているのである。フライはその間の消息を簡潔に「進歩とは vision の成長である。」と言ひ表わしている。僕はここに伝承の場の感覚と人との現代における高度の結び付きを見る。このような知覚においてのみ、vision は今日に生きつづけるであらう。その時我々の歩みは真に進歩と考えられるのではないか。我々はすでにこの地球上に二万年も生棲しているのだ。時の基調は「成熟した」というひびきだ。と「ヴィーナス観測」の主人公は言うのである。我々の近代史はいわば意味の追究におけるいみの喪失という道を歩んでいくかに見える。いみの場の喪失が我々の意味追究を無いみにしているという言い方も出来るであらう。我々の意味追究をいみあらしめる為には Anticlimax への困難を脱出な要するのではない。

ヨーロッパの歴史において、キリスト教の出現は、顕勢的な地上の王国の意味追究を轉換せしめて、馬小屋に生れた貧しい一人の男の生死が、却つて歴史にいみを保証し続けて来たという点で、最も大きなスケールの Anticlimax であつたと言ひ

得るであろう。フライの宗教祝祭劇は、そういう了解をキリスト教的背景において教会のために書いたものである。

しかし私見では、喜劇においてフライの実現してゆくものの形が最もよく表わされているのではないかと思つてゐる。それは亦いかにもイギリス的形態である。とは言え、繰り返すまでもなく、彼の劇の三つのジャンルは、いずれも中心的知覚の理解の異なる部分なのであつて、根本において生命的に連関しているのであり、彼はその間の消息を、

悲劇は人間のデレンマの表現である。

そして、喜劇もその関連において、

喜劇は我々人間がものを理解する働きの本質的部分である。

という様に言い表わし得るのである。とすれば最後に、彼の創作における表現の技術の問題といつたものを考えておきたいと思う。

彼の技法は、やはり一種のリアリズムであると言つて見たらどうだろう。「詩人は画家と同様に、もつと戸外で陽光を浴びて書かねばならない。」と彼は言うのである。風景の中にあつて正確に書くことが彼の表現の目標だと思われる。それは一種敬虔な正確さとも言うべきものだ。敬虔であらうと志す正確さなどではない。正確であるということがいきなり敬虔さを実現する場だ。単なる「写生」などではなくて、風景の内面の争闘に徹底的に誠実であることが、風景を動きにおいてとらえつつ、いつしか風景のうかべる表情の光を実現し、かくて風景が意外な陽光を浴びていることに気づく。それは全く良く作られたものとなり切つて静止しそこに結晶する。彼のリアリズムはそういった風景における、優越したいみでのリアリズムなのである。このような風景の中における創作活動は、我々の眼を、形づくる苦悩から形づくられたものへと向わしめる。フライは実際、創作の労苦を語りはしない。彼は単にそれを、

詩とは天と地をいどきにいい表わすことだ。

という様に言えば足りるのである。彼にあつては人生も芸術も形成に他ならず、更に言えば、よき形をつくることと言うよう

な技術的問題として単に言い表わしうらと思う。

古典とは最もよく形づくられたもの、死に切つたもの、と言い得るならば、古典を読むことは、我々の個々の悲しみや喜びが、よく形づくられたもののシステムの中に入り、全く滅び切つてしまい、亡びにおいて全き形の中に変貌して生命を獲得することをいみする。いわばそこにおいて風景の感覚が現在的に共有される。そこでは古典は一つの問いとなり、我々の形成が応答となつて、風景が伝承されてゆくのである。形成が形成につらなり、我々にとつても形成は、よく形づくられたものを作るといふ優れて技術的問題となるであろう。フライの作品の各々のすぐれた独立性、更にそれら作品がつらなつて形づくるシステムについて、この小論では高度な技術批評といつたものへおぼろげながらもさぐりあてた所で、この稿を終らねばならない。要するに、フライの感受性の成長に対応するものは、技術についての知識であろうと思われ、形成してゆくものは、一つ一つが彼にとつて技術的な問題のつらなりであろう。フライはそういういみで優れて工人であるだろうと思う。人生においては実証家であろう。

此のあやしげな人生というものの只中に生きてゆく困難な工夫といつたものは、人生の技術智とでも言うべきものだが、喜劇の系列は今後も最もよく彼のその間の消息に対応するものだと思われる。

〔後記〕

① これはもと、フライ研究三部作といつた構想で書いたものを、紙数の都合で、第三部のみを——なるべく独立性をもつようにつとめて——ここに発表することにした。

② 参考として、Derek Stanford: *Christopher Fry: an appreciation* (Peter Nevill, London 1951)

〃 : *Christopher Fry Album* (Peter Nevill, London, 1952)

の二書を見た。フライの言つた言葉についての筆者の知識は、彼の作品の序文と上の二書の範囲を出ない。なお書き了えて気がついてみると、「出すぎる不死鳥」「淑女は焚くべからず」「ヴィーナス観測」を場所によつて、夫々「不死鳥」「淑女」「ヴィーナス」という様に略して書いている所がある。念のため。

③ 原文の引用がきりつめられて、(A)日本語訳のみ(B)原文の一部のみ引用(C)原文全部引用という種類にわかれており、更に日本語訳を先に出したというような事情は、方向として、なるべく日本語で言える限り言ってみようと考えたことと、更に読む場合に英語で中斷されないようにした方が読み易いと考え、一つのこころみとしてやってみたのであつた。が、それにも不拘、wisdom, mature, maturity, vision などは、英語の語感の方へ注目したかつたのであつた。